

空



2011・4・5

SORA 36号

道具箱

柴田 佐知子

輪郭のまこと正しき桜鯛

牛車にて真夜は出てゆく雛かな

尽くるものに恋や命や百千鳥

春休み廊下が広くなりにつけり

捨てられし子猫に草の揺れはじむ

―「俳句研究」春号より―

しろがねの帯締めてゆく初句会

鶏鳴のひつぱつてゐる霞かな

大波の大きな音も春めけり

囀にくるまれてゐる雑木山

ふらここのどこも動かず暮れにつけり



大いなる鱗飛ばしぬ桜鯛

罇の塊となり落ちてきし

天領や漆重ねし雛調度

初蝶の触れたる岩の震へけり

ことごとと鳥が音立てりラの花

逃げ水の先を行くなり修行僧

棟梁の道具箱より花ふぶき

赤ん坊は誰かに抱かれ花筵

花の世の母に早き湯たてにけり

昼月の色となりゆく白子干

細き首揃へて鳥の帰りけり

朧夜の塗り葉もて母つつむ

惜命

宮井知英

春浅し

安武晨子

玄海の風を力に桜の芽

万物にゆるゆる寒の解けてきし

熊避けの大鈴腰に桜守

冬籠る余生の計をたて直し

父母を看取りし後の桜かな

生みたての卵と書かれ寒土用

千仞の谷を烟れる桜かな

天領の地や寒鯉のよく太り

父母と決めたる谷の大桜

早や芽吹くものあり杖を軽く持つ

入園式

中央へ竜翔つ如し花吹雪

田が休み畑が休み春を待つ

どの子にも花一杯の朝かな

水仙の供華父へ揺れ母へ揺れ

惜命や術後幾たび桜咲く

春浅し夫在るやうに茶を淹るる

寒 暮

鳳

蛮 華

初 午

松 田 明 子

国宝の墨絵の無地に雪の嵩

ひとり出て昼には戻る鋤始

若衆にのせられて買ふ福寿草

石段を数へて上る午祭

カーテンの何処ぞ蠢く夜木枯

初午や幟はためく山麓

篆額に触れむばかりに冬木の芽

風まとふ幟の下の午祭

大寒の玉砂利に靴ぬかりけり

初午や奥の院まで足のぼし

眉月は寒暮の空の刀疵

紅白の枝差し交はし梅盛り

滅入る日の日記は長し水仙花

しらぬひの海の藍さに海苔育つ

臘梅の金の遍照まのあたり

道草はいつもの土手に犬ふぐり

霞草

小林朱夏

水輪

秋千晴

雪洞の闇を巡らす雛の間

霜柱踏む戸惑ひもありにけり

土筆踏み上棟式の餅拾ふ

焚火する生命線を温めて

塩田の焼塩なめて暖かし

枇杷の花繋がれてゐる犬の声

窮屈な制服となり卒業す

番鴨水輪ひとつに納まりて

囀りや轍の跡の新しき

雪達磨目と口残し消えてをり

ありつたけの枕干したる遍路宿

相輪の光四方に節分祭

春耕の土をあやして終りけり

あやふやな子猫銜へて扉を飛ぶ

母恋し父はなつかし霞草

お供へも一年分の御開帳

海馬

吉村 撰 護

鸞替

矢野 百合子

ぱんぱんと雪折れ竹の鳴る母郷

初糶の声に鱗が光り出す

玄海の浪がうがうと春きざす

電線を得て群遊ぶ初雀

寝袋を磯の初日にさらしけり

賀状より家族の笑顔あふれ出す

溺れ谷盛り上げてゐる波の華

鸞替や恋文交はし合ふ思ひ

がんがんと積む陶石や寒明くる

まづ椀の温みいただき七日粥

春疾風自転車数多薙ぎ倒す

日向ぼこ煙草一本ほどの縁

春満月玄界灘は流れ急

寒明けや雨にけぶれる雑木山

心音も海馬も朧月の中

己が色すでにふふみて冬木立

啓蟄

河隅恵子

享保雛

あさなが捷

筆太にほねつぎとあり寒明くる

輿入れの道具に御紋春浅し

違ふ事考へてゐる日向ぼこ

雛段を組むに指示の割烹着

衣更着や胸元ゆるき佛たち

箱書を読み取り出す雛かな

啓蟄や初昔てふ茶の御銘

薄紙をはづし雛にあいさつす

啓蟄や茶菓子に紅のつつましき

袖口に綿のはみ出す享保雛

啓蟄に押す炊飯器のボタン

菱餅もあられも米よ古都の雨

湯通しの茶第の音や春立ちぬ

整ふまで待たされてゐる雛の客

横にきて猫のねまるや雛御膳

ひとりみてなで肩となる春夕べ

紅梅

苑

実

耶

春祭

樋

口

み

の

ぶ

寒晴れを褒めて回せり洗濯機

病む父にほめられたくて大根煮る

落椿海士の手になる土産物

決心のつかぬ三寒四温かな

つちふるや密にて洩るる謀

芽柳の煙のごとく揺れにけり

石段は磨崖仏へと落椿

明眸の口許思ふマスクかな

紅梅や蜜吸ふ鳥の入れ替はる

鶯の高音に息のつづかざる

薄造木の芽田楽歌舞伎茶屋

街道に残る旧家や雛まつり

実篤のことは掲げてあたたかし

ついてきし犬が尾を振る春祭

菜の花や海に裾引く薩摩富士

遠足の子に囲まれし乳母車

雪の中
長
憲
一

山焼の煙に走る放れ馬

雪しまく阿蘇駆け下る放れ馬

梅見酒翁二人でもてあます

わた雪につつまれし水堰を越ゆ

梅見酒独りの膳に据ゑしまま

荒灘をおさへて雪の降りやまず

くれむつの梵鐘の音も雪の中

春深し足とめて聞く鐘の音



空作品抄
柴田佐知子抽出

百回も母を呼びたる春の夢

囀やなにを塗らうか朝の麴麩

磔像の釘も細れり油まじ

大綿や母なき月日ふはふはと

しんしんと雪降る街を冷凍車

初雲雀最寄の駅の遠いこと

人の名を二人で忘れ日永かな

寒鰯の目に玄海の海路あと

高倉和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部早苗

柴田志津子

だいじみどり

高倉恵美子

大地真理



惜命や術後幾たび桜咲く

眉月は寒暮の空の刀疵

ひとり出て昼には戻る鋏始

母恋し父はなつかし霞草

焚火する生命線を温めて

寝袋を磯の初日にさらしけり

鸞替や恋文交はし合ふ思ひ

横にきて猫のねまるや雛御膳

袖口に綿のはみ出す享保雛

ついてきし犬が尾を振る春祭

雪しまく阿蘇駆け下る放れ馬

諍ひて白鳥首を立て直す

冬晴や厩舎を出でて馬簪え

投げ入れるすなはち空へ吉書揚

宮井知英

鳳 蛮 華

松田 明子

小林 朱夏

秋 千 晴

吉村 摂護

矢野百合子

河隅 恵子

あさなが捷

樋口みのぶ

長 憲 一

松田 明子

原 友 子

田岡 千章

白梅を抜け紅梅の離宮かな

ストーブは家族のやうに見守られ

高僧は女人好めり山桜

しろがねの弾けてゐたる鱒漁

母校の名大きく歌ひ卒業す

宝恵駕や芸妓の蹴出しまづ降りる

通るたび袖をひつぱる花茨

見守りて居らねば鳩の消えさうな

夫の背を叩けば骨の寒さかな

遠足や園児はたえず点呼され

白梅の門へ還りし母の魂

啜へられ子猫だらりと命まで

下京の身の幅の路地松飾る

寒潮や一線黒き佐田岬

石川 叔子

栗原 京子

小林 朱夏

長 節子

亀井 紀子

吉田 葎

だいじみどり

安武 晨子

白水 良子

矢野 百合子

山内 碧

秋 千晴

池田 華甲

吉村 摂護



路地裏を知りつくしたる恋の猫

春の雪露地の奥まではなやげり

いい顔になりし教へ子冬櫛

ふぐと汁食べに海峡渡りけり

全集の終巻に入る春の月

帯解きて猫背にもどる臙かな

朝日より夕日たのもし春隣

弁当の隅にも春の気配あり

春近し猫の加はる電話口

駅前に鳩の増えたる日永かな

通夜座敷明かりの隅の雪女

幼子は厨が好きで春の雪

雀来て凍てたる緑つつきをり

古文書を勝手に解釈神の留守

大地真理

山田正子

青木朋子

桜三奈子

野畑小百合

田代貞枝

鳳 蛮 華

仲里奈央

清水量子

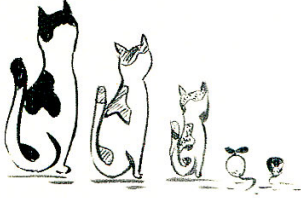
遠山のり子

織田高暢

苑 実 耶

小川 涼

犬丸勝子



初謡米寿の声を言祝がれ

繫留の船多き日や都鳥

卒乳の子の意志固く春隣

龍太忌

桃剪りて焚く火の上に重き月

みの虫のみのが私の半世紀

小島から本土に嫁ぐ春うらら

火と水を使ひこなせる梅日和

餅焼いてひとりの家をふくらます

長男は遠方に住み春夕べ

かたまりて子猫の頭どこだろう

ふじの茜

古川夏子

乾有杏

中原俊之

岸千手

堤堅策

片田きく

川崎よしみ

神谷耕輔

内藤玲二